



若きいのち

令和7年3月18日



校歌「若きいのち」より 初代校長 中山崇 作詞

URL : www.yasaka-j.nerima-kyo.ed.jp

また明日ね

校長 代市 利光

私がまだ、学級の担任をして、保健体育を教えていたころの話です。帰りの学活が終わり、学級委員の号令で「さよなら」とあいさつをした後、必ず「また明日ねー！」とっていました。私のクラスでは私がそれを言うのは普通のこと、「はいはい」という感じで「あしたねー」と返してくれている生徒もいました。毎日言っているので、それは当たり前のこと、特に違和感のない「日々のあいさつの付属のセリフ」みたいになっていました。ある時、学年レクのクイズ大会で、「代市先生の好きな言葉は？」という問題が出た時、「また明日ね」と答えた生徒がいたので、じんわりと定着している様子でした。因みに答えは、「また明日ね」ではないので、不正解です。私自身、その学校には長くお世話になり、赴任したころから、学年やクラスが変わっても、ずっと言ってきたことだから、好きな言葉と言われればそうなのかもしれない、とも思いました。

学校では、毎日いろいろなことがあります。大勢で過ごしているのだから、良いことばかりではなく、けんかしてしまったり、誤解されてしまったりすることもあります。それでも仲間がいて、学校に来れば楽しいことがあるかもしれない。だから、また明日会おうね、というつもりで言っていました。もちろん、今日楽しかったね、また明日ね、というのが一番だったと思いますが。

「また明日ねー」と連日言っていた私ですが、わけあって言えなくなってしまうこともあります。教員になってからの友人で、彼は、私が30歳台に勤めていた学校に近い、別の中学校の保健体育の教員でした。同じ教科で年齢が近いこと、お互いサッカーが専門なのに、学校の事情でバスケットボール部を受け持っていた、という共通点から、よく話をするようになりました。私がルールや指導法がよくわからなくて困っていると、練習試合に誘ってくれて、審判の練習をさせてもらったりしました。2年ほどして彼が異動するまで、仲良くしてもらっていました。その後、出張や研修会で顔を合わせることもありましたが、お互い中堅の教員ということや勤務地がかなり離れていたため、それ以上の付き合いはなくなって、年賀状を交換するくらいになっていました。その彼ががんを患っていると聞きました。体格もよく、大きな声でいつも元気な彼のことから大丈夫、と思っていたので、治療のための休職から復帰して、少しずつ仕事のペースも戻っているらしいことが伝わってきたときには安心しました。だから、その翌年に亡くなったとの知らせを受けた時には驚きました。毎日会っている仲間ではなかったけれど、彼にはもう「また明日ね」とは、言えません。これとは全く違いますが、春は旅立ちの季節、別れの季節でもありますから、「また明日ね」と言い難くなる仲間もあるかもしれません。進級を控えた1・2年生、卒業迎えた3年生のみなさんは、進級・進学に向けてそれぞれが準備していることと思います。せっかく新しい環境に身を置くのですから、来年度も元気に登校して、互いに「また明日ね」と声を掛け合える日がたくさんあることを願っています。

保護者の皆様へ

この一年、たいへんお世話になりました。生徒が無事に学校生活を送ってこられたのも、保護者の皆様のご理解とご協力があったることと、感謝申し上げます。令和7年度もよろしくお願いいたします。